

『源氏物語』研究

——具体的な日付の性質と役割について——

林 沙 妃

はじめに

従来、登場人物の年齢や物語に書かれていない空白の期間について等、『源氏物語』内に流れる時間については様々な角度から研究がなされてきた。しかし、物語全体の具体的な日付のみに焦点を絞り論じられているのは、播磨光寿氏の「『源氏物語』探訪(六)——具体的月日の叙述法」^(注1)と進藤義治氏の「源氏物語中の日付のかたよりについて」^(注2)しかない。

『源氏物語』にとって日付とは何であろうか。そもそも物語文学は日記文学等とは異なり、詳細な日付を指定せずとも成立可能な文学作品である。話を進める上で大まかな時の流れや季節の移り変りを示したのであれば、自然描写や何月上旬のような記述で事足りる。物語文学に具体的

に日付を記述しなければならぬ理由が無いのであれば、『源氏物語』自体に、日付を記述しなければならなかった理由を求めることができるのであろう。

本稿は『源氏物語』を日付という観点から見た時、正編と続編の間には、何らかの差が見られるのかということ考察した。

なお、本稿で記す本文は、断り書きが無い限り『新編日本古典文学全集』^(注3)より引用したものを使用し、必要に応じて傍線などを施した。

第一章 『源氏物語』における日付

この章では主に先行研究と研究対象とする日付の定義について述べる。なお、『源氏物語』には本稿で定めた定義

上の日付の用例数は一〇〇以上ある。しかし今回は紙面に限りがあるため、日付の具体的な用例については必要であれば適宜述べていくこととし、本稿で具体的な用例全てを挙げることはしなかった。

第一節 日付に関する先行研究

まずは、従来の研究では『源氏物語』の日付及び月日の記述についてどのような論が成されてきたのかということを確認しておく。

池田節子氏^(注4)は、月の記述や年中行事等を通じて月が明示されているものを数えられ、「一月、十二月はかなり多くなっているが、それは年の変わり目を記すことが多いため、「記事の分量はそれほど多くはない」とされた上で、五月、六月、七月が目立って少ないことを指摘された。池田氏が述べられるには、これらの月が取り上げられるのは須磨巻、幻巻の一年間、そして玉鬘十帖における一月から八月まで等の、「月日が順を追ってたどられており、外在する時間が、物語を進行させている」「特殊な場合」であるということである。そして「順を追って月日が過ぎる部分が物語を区切る働きをするのは、それが永遠に循環する月日象徴するからであろうか。循環する月日が描き出されることによって、物語は一時休止、あるいは収束するものである」と述べられる。

池田氏の述べられる傾向は確かに見受けられる。しかし、物語の収束という点から考えたとき、『源氏物語』全体の収束点である続編終盤において、循環する月日のないことが気にかかる。あくまで池田氏が指摘されたのは正編においての「循環する月日」のみであり、続編ではまた異なる法則によって月日は描かれている可能性がある。

播磨光寿氏^(注5)は、具体的な月日の言い切りの用例として、賢木巻の「師走の二十日」、明石巻の「三月十三日」、梅枝巻の「二月十日」、藤裏葉巻の「三月二十日」、若菜下巻の「十月二十日」、御法巻の「三月十日」の六例を挙げられた。そして、それらの日付は「物語展開の重要な転換点を示唆」するものとして使用されており、繋ぐと「光源氏の物語の概略が見えて」くるとされた。

確かに、具体的な月日の記述はまるで構成の骨子であるように見える。しかし物語展開上重要な人物であるはずの紫上に関する日付が晩年のみであるため、構成の骨子とまでは言い切れないのではないか。もし構成の骨子であるならば、紫上との物語が始まる序盤にも日付が設定されるべきだろう。加えて、播磨氏が見落とされている幻巻の「七月七日」の存在も問題となる。これは光源氏が七月七日の深夜に、例年であれば詩歌を作り演奏等をするが、今年は紫上が居ないために、物思いに沈んで過ぐすという場面の記述である。よって、「物語展開の重要な転換点」を担うと

は些か考え難い。

以上、日付に関する先行研究を見てきたが、本稿で考察対象とする日付については、先行研究とはまた違う新たな定義を定め論じる。

第二節 研究対象の定義

今回の調査で対象とする日付の定義は、次のように定めた。

まず原則として、本文中で数字を用い、且つ「日」と共に記述されている日付を対象とした。従って、年中行事等から日付の推測が可能な場面でも、そこに日付の記述がなければ調査対象としなかった。また、対象は「具体的」な日付ではあるが、多少曖昧な日付も対象とした。何故なら、「朔日」などの「一日」と「月の上旬」二つの意味を示すもので、文脈からどちらの意味か明確にできないものがあるためだ。

このような定義の下で『源氏物語』の日付を調査したところ、全てで一一五例見られた。

まず、巻ごとに日付を考察した。^(注6)

幾つかの巻では、日付が出てくる箇所は常に特定の人間関係と関わる場面であったり、日付がある場面のみを繋ぐと、一つの筋が出来ていたりするという様な傾向が見られる。次よりその傾向が特に顕著である巻を具体的に挙げて

いく。

まず若紫巻である。この巻の日付は二例。源氏が病に悩み始めた日である「去ぬる十余日のほどより」と、僧都が源氏に宛てた手紙に記されている、尼君の命日である「たちぬる月の二十日のほど」である。源氏は病に悩まされたからこそ僧都の元を訪れたため、もしこの病がなければ若紫を垣間見することはなかっただろう。また、尼君が亡くなったからこそ、源氏は若紫を連れ去ることに踏み切ることができた。二つとも源氏が若紫を手元に置くため必要な契機であり、日付がこの二か所のみであることは注目すべき点である。

次に末摘花巻が挙げられる。この巻の日付は四例。源氏が末摘花と初めて契った「八月二十余日」、源氏が末摘花に衣装箱を贈った「晦日の日」、源氏が都の男踏歌の稽古を見て、対比的に寂しい常陸邸を思い出し、末摘花に会いに行く「朔日のほど過ぎて」、源氏が白馬の節会の夜に末摘花の元を訪れる「七日の日の節会」である。末摘花巻は「晦日の日」はその前に末摘花から源氏へ元旦の装束を贈るという行動を起こしているものの、四例全ての日付が源氏から末摘花への行動する日となっているのは興味深い。

明石巻の日付は五例ある。明石入道が源氏に語る、異形の者の夢を見た日の「去ぬる朔日の夢に」、明石入道の夢に出てきた異形の台詞である「十三日」、朱雀帝が故院の

夢を見て病み始めた「三月十三日」、明石入道の誘いで源氏が明石君を訪ねた「二十三日」、源氏に京へ帰還するようにとの仰せがくる「七月二十余日のほどに」である。「去ぬる朔日の夢に」は須磨巻の「弥生の朔日に出て来たる巳の日」と重なっており、「十三日」は異形の台詞と朱雀帝が故院の夢を見た日が重なっている。同じ日付を示すことで、源氏・明石入道・京の三か所で同時に物語が動いていたことを示す効果がある。また、最後の「七月二十余日のほどに」と合わせて考えると、源氏が須磨流離から力を蓄えて京へ帰るまでの大筋のみを拾い出すことが出来る。

続編、総角巻の日付は三例である。一例目「九月十日のほど」は匂宮があまり宇治に行くことが出来ないがために姫君たちの不安を呼び、それを受けて、薫が匂宮に共に宇治に向かう機会を与える場面である。二例目「十月一日ごろ」は、匂宮が宇治に向かう口実のため紅葉狩りを行う日である。しかし口実に過ぎない紅葉狩りが思いがけず大仰なものとなってしまうため、匂宮は本来の目的である中君の元へ行くことが出来なかった。そして、近くまで来ても会わなかった匂宮を大君は恨み、男性不信を募らせてしまう。三例目「神無月の晦日」は、匂宮が中君に会えていないことに焦る日である。匂宮がこの時点で最後に中君の元を訪れたのは、薫が手配した「九月十日のほど」であり、一か月以上会えていないことを示している。この間にも、

大君と中君は匂宮へ不満を募らせていく。

総角巻の日付の共通点は、全て匂宮が中君に会いに行くことに関するものであることである。薫だけが女君達と関わり、匂宮が関連しない場面に日付はない。つまり、日付は全て匂宮を語るために用いられているのである。これらの日付という明確な目印を伴い積もる日数は、大君を精神的に追い詰めていくことになり、その果てに総角巻の終盤で大君は亡くなってしまふ。日付はその焦燥をより直感的に読み取りやすくするための目印としての役割を果たしていたと考えられる。

最後は浮舟巻である。浮舟巻の日付は八例ある。匂宮が浮舟の行方を知る「正月の朔日過ぎたるころ」、浮舟付きの女房が、長く薫が訪れないことで落ち込む浮舟を慰める際に、この頃には来るだろうと挙げた「朔日ごろにはかならずおはしましなむ」、薫が匂宮と浮舟の関係を知らずに、浮舟が大人びたことを喜ぶ「朔日ごろの夕月夜に」、内裏で詩会が開かれ、匂宮が薫の浮舟への思いを知る「二月の十日のほど」、匂宮の乳母で受領の妻となった者が任国に下る予定の日である「この月の晦日方」と「二十八日に下るべし」、薫が浮舟を引き取る予定日の「四月の十日」、浮舟が匂宮から、そちらに赴く旨を記した手紙を受け取る「二十日あまりにもなりぬ」の以上八例である。この八例に共通していることは、匂宮と薫の間で、精神的に危うく

なつていく浮舟の過程が描かれていることである。まず、前半にある匂宮が浮舟の行方を知る日や垣間見する日によって、浮舟が精神的に追い詰められる土台が形成され始める。そして、匂宮の影響を受けた浮舟と薫の場面や、匂宮が薫を出し抜こうとしながらも最終的には失敗する場面など、日付が記されている場面だけを読んでも、浮舟が二人の男君の間で精神的に追い詰められる過程が理解できる。総角巻同様に、日付が目印としての役割を果たしているのである。

以上のような日付の、日付が出てくる箇所は常に特定の間関係と関わる場面であったり、日付がある場面のみを繋ぐと、一つの筋が出来ていたりするという様な傾向は、両編に共通して見られる特徴である。続編において、日付が示す人間関係の対象に、大君と浮舟が挙げられていることは特に注目するべき点である。この二人の女君の関連性についての詳細は、第二章第二節にて更に言及するため、本章では一旦置いておく。

次に、日付別の用例数について考察した。^(注7)

日付別の用例数で注目しておきたいことは、正編でも続編でも多い日付には似たような傾向が見られることである。正編は多い順に記すと「二十日」が一七例、「朔日」が一四例、「十余日」が九例となった。「二十日」、「十日」に関して「二十日」と「十余日」、「十日」と「十余日」

別々に項目を立てたが、これらを例えば「十日」と「十余日」を併せてカウントしたとしても、順位に変動は見られなかった。続編も同様に多い順に記すと「朔日」が十例、「二十日」が七例、「十日」が四例となる。なお続編については「二十日」と「十余日」の用例数を併せると朔日と同数同順位となる。以上のように順位を挙げると、用例数が多い日付の上位三つが正編と続編変わらないことが見出される。何故このようなことが起きているのだろうか。

「朔日」は「月の上旬」という意味も含んでいる上に、「源氏物語」が正月の場面が多いことも、「朔日」が多くなっている要因の一つである。また、「十日」と「二十日」についても、それぞれ「十日過ぎ」や「二十日余り」等と、その前後を含むような日付表記が多く見られることから、それらが周辺の日付を含んでいると考えるのが自然であろうか。

進藤義治氏は^(注8)「季節の移り変りを実感するのは、人々にとつては、月の変り目、月末や月初という名目上の変化時点よりも、その月になって、もう月中半も過ぎて廿日頃」「ふと身のまわりの自然・風景の季節的变化に気がついた時ではないだろうか」と、二十日や二十日余りの日付が多い理由を、「季節とともに経過して行く生活の実感が作用している」とされた。また、物語の大きな出来事が五月五日や七月七日等の日に偶々発生したとするのは、「いかに

も出来すぎて作り物臭い感じ」がしてしまつたため、「偶々生じた或る出来事、訪問、旅、宴などは祝日などいわれのある日を避けているように見える」と述べられている。また、行事以外での物語上での日付の選ばれ方は、「作者が物語を創って行く過程で、作者の好みによって選び取られて来た」「紫式部の精神世界の内なる日付」であるとして来た上で、「七月七日とか子の日とか豊明節とかいう現実における宮廷貴族の世界の日付は紫式部にとっては外的な世界のものである。紫式部は光源氏の世界をそのような彼女の心にとつて外的な現実の世界に描くのではなく、自分の側に引きつけて創り出し」と述べられた。

確かに、『源氏物語』以前の作品で頻繁に見られる、「五月五日」や「七月七日」、「九月九日」等の節供^(注9)が『源氏物語』ではあまり見られないことは、進藤氏の述べる通り敢えて避けられた結果であると言えるかもしれない。だが、断定はし兼ねる。何故かと言うと、多くの行事は日付を示す要素も持ち合わせているがために、わざわざ行事と共に作者は日付を記すことが少なくなつたのではないか。その結果として、『源氏物語』の日付を拾い上げると、行事外の日付ばかりとなつたのだと考えられる。

また進藤氏が同論内で指摘されている、二十日周辺でなければならなかつた理由を推測し難い、「二十日」周辺の日付に、頻繁に「ごく普通の自然の美」が描かれているこ

との多さは見過ごせない。この件については、進藤氏の述べる「生活の中の季節の移り変りの実感に由来するもの」であるということに賛同したい。賛同した理由は、進藤氏の述べる理由に加えて、既に指摘してきたように「二十日」の表現は「二十日の月」と記述されているもの以外は、藤裏葉巻の「三月二十日の大宮の物忌日」以外、全て「二十余日」「二十日過ぎ」などの曖昧な日付表現になっているためだ。物語の中で必ず「二十日」でなければならなかつたのは「月」と「物忌日」のみであり、それ以外の場面では、あくまでも「二十日の頃」であれば良かったのだ。そう考えると、進藤氏の述べる主張も合点がいくようである。作者が読者に示したかったのは、「二十日」ではなく「二十日周辺」における人々であるのだ。

最後に、日付が持っている時間軸に着目し、その時間軸によって、大まかに三つの分類に分けた。^(注10)

分類一つ目は「日付が示された物語内の時の時間軸」と「日付が示す時間軸」が一致しているものである。これを便宜上分類Aとし、物語全編を通して九八例見られた。

分類二つ目は、台詞中における記述等、「日付が記された物語内の時間軸」と「日付が示す時間軸」がずれているものである。「日付が記された物語内の時間軸」から見て「未来の日付」も「過去の日付」も、これら時間軸のずれている日付を纏めて分類Bとし、一九例見られた。この分類B

には正編と続編の特色の違いが顕著に見られたため、本稿では分類Bを中心として取り上げることとし、第二章で詳しく述べていく。

分類三つ目は、分類Aにも分類Bにも当てはまらない日付となる。『源氏物語』において重陽の宴は「九日の宴」と表記され、「重陽の宴」と本文中に記述されることは無い。このような、行事名としての日付を分類Cとし、一例見られた。

第二章 時間軸

第二章では、第一章第二節で便宜上分類Bとした、「時間軸のずれている日付」に着目する。分類Bとは台詞中における記述等、「日付が示された物語内の時間軸」と「記述された日付が示す時間軸」がずれている日付である。

第一節 時間軸のずれている分類

分類Bの日付は実際にはどのような場面で用いられ、どのような日付を示しているのかについて、まず述べておく。まず分類Bの用例一九例について、次に具体的に述べておく。なお未来の日付のものには、本文からその予定が実行されたか判断できるものには「○」を、予定が確実に実行されなかったと思われるものには「×」を記し、実行不実

行が判断し難いものには記号を記さなかった。

①若紫卷「去ぬる十余日のほどより」(過去)

源氏の台詞。源氏が僧都に招かれる際、自身が病に悩まされ始めた話をしている時の台詞内である。

②若紫卷「たちぬる月の二十日のほどになむつひにむなく見たまへなして、」(過去)

九月二十日頃、僧都から源氏に宛てられた手紙に記されていた尼君の命日を示す。

③明石卷「去ぬる朔日の夢に、」(過去)

三月一日。明石入道の台詞。明石入道が語る異形の者の夢を見た日である。この夢を見た後に天候が悪くなったという話の為、源氏が祓を行った須磨巻の「弥生の朔日に出で来たる巳の日」よりも前だと思われる。

④明石卷「十三日にあらたなるし見せむ。」(未来○)

三月十三日。③で語る明石入道の夢に出てきた「さまことなる物」の台詞。物語が「さまことなる物」の台詞通りに進んだため、予定は実行されたと判断する。

⑤濔標卷「十六日になむ。」(過去)

三月十六日。「三月朔日のほど」に源氏が明石君の元に遣わしていた使いの者の台詞。源氏は多忙により明石君を訪れることが出来なかったが、使いの者を通して出産を知ることが出来た。

⑥少女卷「朔日などには、かならずしも内裏へ参るまじう

思ひたまふるに、」(未来)

元旦。年の暮に大宮に向けた夕霧の台詞。正月の準備をしている大宮に、夕霧は元旦に必ずしも参内しなくても良いと思うと言うが、参内するようにと切り返される。

⑦行幸卷「十六日、彼岸のはじめにて」(未来○)

二月十六日。吉日であり、その前後に良い日がないと知った源氏は、この日に玉鬘の裳着を行うことを決め、準備に移る。

⑧藤袴卷「十三日に、河原へ出でさせたまふべきよしのたまはせつる。」(未来○)

八月十三日。夕霧の玉鬘への台詞内。源氏が、玉鬘が喪服を脱ぐために十三日に河原へ赴くように言っていたことを伝え、夕霧自身もそれに同行する意思を伝える。除服は「かくて御服など脱ぎたまひて」の一言で済まされるため、具体的な描写は無い。

⑨若菜上卷「この月の十四日になむ、」(過去から未来○)

三月十四日。明石入道の手紙に記述。明石入道はこの日に明石の浦の邸を捨て、入山を実行した。分類Bの中でも少々特殊な日付であり、第二節にて詳細を説明する。

⑩若菜下卷「二月十余日と定めたまひて、楽人、舞人など参りつつ、御遊び絶えず。」(未来×↓○)

二月十日過ぎ。源氏が六条院主催の朱雀院の五十の御賀を行うと定めた日。しかし紫上が発病したため、御賀は

延期した。

⑪若菜下卷「十二月になりけり。十余日と定めて」(未来×↓○)

十二月十余日。源氏はこの日に⑩から延びていた御賀の祝いを催すと決めたが、結局二十五日まで延びてしまった。試案から「二十五日」までは柏木の病の様子が延々と語られており、御賀も柏木が欠席のまま執り行われてしまった。その御賀は物語中で詳細に語られることは無い。

⑫早蕨卷「二月の朔日ごろとあれば、ほど近くなるままに、」(未来○)

二月上旬。中君の京への転居予定日。

⑬早蕨卷「中納言は、三条宮に、この二十余日のほどに渡りたまはんとて、」(未来○)

二月二十日過ぎ。薫は中君の移った二条院に近い、三条宮に移ろうと考えていた。

⑭宿木卷「この二十日あまりのほどは、」(未来×)

八月二十日頃。八の宮の三回忌の頃であり、中君は薫にこの日に宇治へ同行して欲しいと願う。薫は中君の希望に副うと告げつつも、中君の三回忌を契機に宇治へ籠りたいという願望は阻止する。

⑮宿木卷「この月は過ぎぬめれば朔日のほどにも」(未来×) 九月初旬。中君の宇治へ行きたいという願望の同行を申

し出た薫は、夜になった為下がろうとした中君を引き留める為に出発する予定日を尋ね、それに対する中君の返答である。なお、この後のこの会話通りに、九月初旬に薫が中君を宇治へ連れ出すことは無い。

⑬浮舟巻「朔日ごろにはかならずおはしませむ」（未来）
二月初旬。薫が長く訪れないことで塞ぎこんでいる浮舟に、女房が来月（二月）の初め頃には薫も来るだろうと慰めている。

⑭浮舟巻「この月の晦日方に」（未来 ○）

三月末日。匂宮の乳母が受領である夫の任国に下る予定日である。匂宮はその乳母の家を浮舟を引き取ったあとの隠れ家にするつもりでいる。匂宮は薫が浮舟を引き取る準備を進めていることを把握した上で、先手を打つ準備をしているのである。

⑮浮舟巻「四月の十日となん定めたまへりける」（未来×）

四月十日。薫の浮舟を引き取る予定日である。

⑯浮舟巻「二十八日に下るべし」（未来○）

三月二十八日。⑭同様、匂宮の乳母が夫の任国に下る予定日。匂宮は浮舟にその日に迎えに行くつもりである旨の手紙を出したが、嚴重な警備に阻まれ会うことは叶わなかった。

正編の①から⑪には「過去の日付」も「未来の日付」もあるが、続編の⑫から⑲では「未来の日付」しかない。物

語が進んでいる続編の方が回想できる日付の数は正編よりも多い筈であるのに、何故このようなことが起きているのであろうか。

第二節 正編と続編の時間軸における特色

正編と続編の分類Bの傾向の差は、両編の特徴の差が原因であると考えられる。よって、それぞれの編の特徴について、まず押えていく。

正編の分類Bを見ると、病に侵された日、命日、異形の者の告げた日等、人の意思が介在しないで決められた、外在的な要因による日付で殆ど占められていることがわかる。加えて、日付を伴い立てられた予定は、最終的には達成されることも注目すべきである。そもそも正編は、源氏が受けた予言という大枠の中で物語が展開している安定した世界である。源氏の流離も、栄華も、人が選び選択した行動の果てであろうとも、結局は人の意思が介在しない外在的な力による予定調和の事柄であるのだ。その予定調和は日付からも見て取ることが出来、その世界において予定が達成されることは必然なのである。安定した世界であるからこそ、既に確定した過去、つまり安定した日付を使用出来ると言えるのかもしれない。

唯一正編で人の意思が大きく介在した日付は、⑨の明石入道の入山日である。この日付は分類Bの中でも少々特殊

な部類である。明石入道が手紙を書いたのは三月十四日以前であり、手紙を書いた時を基準とすれば十四日は「未来の日付」であるが、この手紙を明石君が受け取り読んだのは十四日以後であり、こちらを基準とすれば、十四日は「過去の日付」となるのである。ここで重要なのは、明石入道は入山する予定の日付を「自分の意思で決めて、実行した」ということである。これまでの明石入道に関わる分類Bは③と④である。③は異形の者の夢を見た日、④は異形の者が入道に告げた日であり、両日とも、その日付を決めることに明石入道の意思は介在していない。夢のお告げに従い行動し、日付もそれに依ってきただけは、正編の予定調和の世界に決められて生きてきたのである。しかし、彼は最期は自分の意思で日付を決定してみた。そこには大きな意義がある。もし正編の「未来の日付」全てが予定調和の中で決められていたら、人間らしさ薄い物語となってしまう。ここで明石入道が自らの意思で日付を決定することで、対比的に人間らしさが強調されるのである。

なお、明石入道が入山日を「三月十四日」に定めた理由は、「三月十余日」の明石女御の若宮出産が原因であると思われる。出産の契機は人が作るが、いつ宿るかというのは、人の預かり知らぬ所である。そして、若宮出産を受けて明石入道が入山したということは、また少なからず外在的な力の影響を受けているともいえる。しかし、若宮が生

まれたからといって、すぐに入山しなければならぬわけではない。やはり彼自身の意思であると考え、そこに重点を置いて良いだろう。手紙の内容からも、彼の人生の指針は源氏と出会う前から、ずっと夢の影響を受けたもので出上がっていた。そのような彼が、自らの終わりを自らで決めるということに意義がある。

また、唯一正編で日付を添えて立てた予定がずれこんだのが、⑩の六条院主催の朱雀院の御賀の予定である。この予定は⑪で十二月十余日と定めるも更にずれこみ、結局二十五日に行われることとなってしまった。⑩の予定が流れた原因は紫上が病に伏したことで源氏に御賀を催す心の余裕がなくなってしまうからである。最終的に御賀は催されるものの、この予定がずれる原因となった紫上の病が、源氏を六条院から引き離れたが故に、柏木が女三宮の元に近づく機会を作り出してしまった。このことは正編の安定した世界を作る予言には無いことであり、この密通から産まれた薫が不安定な続編の世界の中心人物となることは興味深い。この予定から正編の安定した世界に亀裂が入り、続編の不安定な世界へと少しずつ世界が変わり始めたのだろう。

続いて、続編の分類Bを見ていく。続編は既に述べたように、「未来の日付」しか見られない。更にその「未来の日付」に記された予定は、正編とは異なり必ずしも達成さ

れるわけではない。また続編の「未来の日付」の殆どは人の意思が決めた事であるということも、正編とは異なっている。続編には、正編の源氏の予言のような、世界を大枠で括る予定筋が存在しない。そのために、続編は不安定な世界であり、日付も必然的なものではなく、人間の意思で決められた「未来の日付」しかないのである。

また、浮舟は自らの意志で決めた日付が無いことが気にかかる。続編の主要で己の意思で決めた日付があるのは薫・匂宮・中君であり、大君と浮舟にはない。この自分の意思で決めた日付が無い大君と浮舟に共通する点は、薫と匂宮に振り回されたことである。浮舟が薫に大君の形代として求められていたことも、二人を結ぶものであろう。

大君と浮舟を具体的な日付の観点から考えると、精神的に追い詰められる様が具体的な日付を伴って描かれていることが共通している。大君については、総角巻に日付が記述されることで匂宮が長い間中君に会いに来ないことがよりわかり、それにより大君に不満と心労が溜まることが即座に伝わる仕組みがある。総角巻の日付が記されている期間はそのまま大君を病ませ、死に追い詰める方向へと進んでいく。同様に浮舟も日付によって、より具体的に薫と匂宮の間に挟まれ、迫りくる時とともに精神的に追い詰められていく状態を読み取ることが出来る。

大君と浮舟と関連がある女君といえば中君が考えられる

が、二人が最後まで男君に悩まされたことに対して、中君は匂宮の長男を出産することで安定したという違いがある。また、中君は出産以前の不安定な状況下ではあったが、宿木巻において自らの意思で日付を提示している。このようなことができたのは、既に男君からの受け身で終わる存在から転じることができると予兆であったのかもしれない。最終的に、中君は浮舟の存在を提示することで、大君亡き後の薫の求愛からも逃れることができる程の存在になるのである。

ちなみに、浮舟が最後に関わる日付は、これは分類Aだが、手習巻の「八月十余日のほどに」である。中將が浮舟を尋ねた三度目の日であり、妹尼も浮舟に返事をするように促していたりと、浮舟は自らの意志で返事はしないものの、最後の日付においても男君に悩まされる立場であることは変わらない。

以上により、分類Bは、正編と続編の特性の違いを反映させていると考えられる。正編は予言の下、予定調和の安定した世界であるが故に、「未来の日付」に加えて既に揺るがない「過去の日付」をも使用することができる。対して続編は不安定な世界であるが故に、人の意思を反映させた「未来の日付」を頻繁に使用することが可能となるのである。

おわりに

本稿では、『源氏物語』を日付という観点から見た時に、正編と続編の間では何らかの差が見られるのかをいうことを、テーマとして考察し、論じてきた。

まず、具体的な日付の性質や役割には、正編と続編で似たような傾向にあるものと異なる傾向にあるものの、両方の特徴が見出された。両編に見られる傾向は、幾つかの巻では、日付が出てくる箇所は、常に特定の間関係に関する場面であることだ。具体的の日付を示すことで読者の意識に強く訴えるためや、時間の経過をより理解し易くすること、待ち続けている登場人物の心を読者がより理解出来るようにするための工夫であると考えられる。これらは『源氏物語』全編を通して見られる、日付の目印的な性質であると言えよう。

正編のみに見られる日付の傾向は、「時間軸のずれている日付」において「過去の日付」と「未来の日付」の両方が見られることである。これは、正編の大枠は予言によって出来上がっているために、「未来の日付」は人の意思が介在し難い外的な要因によって決められているものが多くなっていることと関わりがあると言える。そして外的な要因の影響を受けた「未来の日付」による予定は、続編の中心人物である薫の出生の契機になるもの以外は全て達成

されていくのである。逆に、続編のみに見られる傾向は「時間軸のずれている日付」は「未来の日付」しか見られず、その予定は未達成となることも多いことである。更に、正編とは異なり、その「未来の日付」は人の意思で決定したもので構成されており、正編のような大枠がない続編の不安定さが、日付の面からも伺えるようである。この日付の性質は、『源氏物語』の正編と続編の世界の法則が異なっていることを象徴していると考えられる。『源氏物語』において日付は、読み手へのメッセージであり、正編と続編の世界の法則が異なっていることを象徴する目印でもあるのだ。

注

1. 播磨光寿「源氏物語」探訪(六)―具体的月日の叙述法(一)〔滝川国文〕一四号 一九九八年三月 國學院女子短期大学国文学会
 2. 進藤義治「源氏物語中の日付のかたよりについて」〔源氏物語の探究〕一四巻 一九八九年 風間書房
 3. 『新編日本古典文学全集 源氏物語』二〇～二五巻(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 一九九四年～一九九八年 小学館)
 4. 池田節子「源氏物語の月日表現」〔国語と国文学〕六四号 一九八七年二月 至文堂
 5. 注1に同じ。
6. 詳細な巻ごとの用例数については、量が多いためここで挙げる

ことはしない。そのため、付の表1をご覧頂きたい。

7. 詳細な日付ごとの用例数については、「二十日あまり」などは「二十日」とカウントし、「中の十日」など二十日を示すものの少々変わった記述の仕方であるものは、新たに項目を立てて分類するようにした。全ての用例数は量が多いため、ここで挙げることはしない。そのため、付の表2をご覧頂きたい。

8. 注2に同じ。

進藤氏この論文において挙げられている日付の数と、本稿で挙げている日付の数は異なっているが、進藤氏が本文とともに具体的に例を挙げられている数はわずかであるため、その正確性についての判断はしかねる。

9. 参考として『源氏物語』以前の文学作品の具体的な日付について述べておく。

『竹取物語』では五例見られた。物語のポイントとなる「八月十五日」が三例、その一カ月前となる「七月十五日」が一例であった。この日付の偏り方は「八月十五日」の月が物語の核に関わっている『竹取物語』ならではのものであり、その日付を鍵としているからこそ、他の場面では日付を示さないようにしている姿勢が見られる。

『大和物語』は二例見られた。二例ともに正月の日付である。

『平中物語』は「七月七日」の一例のみであった。

『うつほ物語』はとても多く、八三例見られた。日付が示す時間軸にも幅があった。月別に見ると用例数が多い日には偏りが見られ、一月、七月、九月がそれぞれ一二例ずつ見られた。一月は正月行事と共に語られることが多く、七月は七日の七夕、九月は九日の重陽の宴に関して語られる時に出される場合が多かった。これは「九日の宴」のように、日付表現がそのまま行

事名として用いられていたことも影響している。

『落窪物語』は一九例見られた。行事に沿って日付を明示している箇所が少なく、「七月七日」、「三月三日」のみ行事に日付を添える形を取っていた。他の日付は、その日に結婚式を定め、それに向けて準備をしている文脈で用いられるなど、この物語内のみで意味を持つ日付で構成されていた。

『堤中納言物語』は二例見られ、月を示す時時のみ登場しているということが印象的である。

10. 分類ABCの巻別の用例数について付の表1に記しているため、そちらをご覧頂きたい。

表1 『源氏物語』における日付の巻別用例数

松風	絵合	関屋	蓬生	滯標	明石	須磨	花散里	賢木	葵	花宴	紅葉賀	末摘花	若紫	夕顔	空蟬	帚木	桐壺	巻名	
	2			4	3	3	1	6	2	2	3	4		3				A	
				1	2								2					B	
																1		C	
柏木	若菜下	若菜上	藤裏葉	梅枝	真木柱	藤袴	行幸	野分	篝火	常夏	蛩	胡蝶	初音	玉鬘	少女	朝顔	薄雲	巻名	
	8	6	5	2			1		1		1	1		1	2		1	A	
	2	1					1	1							1			B	
																		C	
合計	夢浮橋	手習	蜻蛉	浮舟	東屋	宿木	早蕨	総角	椎本	橋姫	竹河	紅梅	匂兵部卿	幻	御法	夕霧	鈴虫	横笛	巻名
98		1		4	1	7	2	3	2	1	4			5	3	3			A
19				4		2	2												B
1																			C

表2 『源氏物語』における日付の日付別用例数

一四日	一三日	一二三日	一日	十余日	一〇日	九日	七日	五六日	五日	二日	朔日	日付
2	4	1	1	9	4	2	5	1	3		14	正編
1	1				4	1	1	1			10	続編
合計	晦日	二八日	二五日	二三日	中の十日	二十余日	二十日	一九日	一七日	一六日	一五日	日付
85	3		1	2	3	8	17		1	3	1	正編
33	2	1				3	7			1		続編

(はやしとぎ)